

農業技術情報

令和5年8月1日

池田町農業構造政策推進協議会

十勝農業改良普及センター

十勝東部支所 015-572-3128

J A 十勝池田町 572-3131

高島支所 573-2111

池田町産業振興課 572-3118

農作物の生育・作業の遅速(8月1日現在) ()内は平年値 移植てん菜のみ3町平年値の平均

作物名	遅速日数	生育状況		農作業状況
秋まき小麦	+6	草丈 72.1 (77.6) cm 穂長 8.9 (8.9) cm 穂数 575 (673) 本/m ²	成熟期 7/15 (7/21)	収穫始 7/17 (7/24) 収穫期 7/21 (7/28) 収穫終 7/23 (8/1)
ばれいしょ	+4	茎長 73.8 (87.3) cm 茎数 3.9 (3.6) 本	終花期 7/19 (7/22)	
大豆	+12	茎長 88.3 (68.0) cm 葉数 9.6 (9.5) 枚		
小豆	+9	茎長 55.1 (34.9) 葉数 11.2 (8.2)	開花始 7/19 (7/26) 開花期 7/21 (7/28)	
菜豆(金時)	+10	茎長 57.3 (44.9) 葉数 4.1 (4.1) 着莢数 166.5 (53.8)		
菜豆(手亡)	+10	茎長 52.7 (50.3) 葉数 7.6 (7.4) 着莢数 312.0 (33.9)		
てん菜(移植)	-	草丈 65.5 (63.3) cm 葉数 21.8 (25.7) 枚 根周 29.0 (28.8) cm		
てん菜(直播)	+6	草丈 53.1 (58.0) cm 葉数 25.8 (21.6) 枚 根周 25.5 (23.7) cm		
牧草	+1	2番草 草丈 60.0 (59.3) cm		
サイレージ用とうもろこし	+9	草丈 301.0 (261.9) cm 出葉数 17.5 (16.4) 枚		
たまねぎ	+4	草丈 67.1 (79.2) cm 生葉数 7.8 (8.7) 枚 葉鞘径 17.6 (20.1) mm 球径 6.9 (5.8) cm		

畑作

<秋まき小麦>

1 収穫跡地の後作緑肥作付

- ① 後作にながいも・ごぼうなどを作付けする場合は、キタネグサレセンチュウ対策のため、えん麦野生種が有効です。
- ② えん麦野生種には、ばれいしょのそうか病軽減効果や小豆落葉病の抑制効果もあります。表2を参考に、ほ場の条件に応じた緑肥を選定しましょう。

表1 小麦後作緑肥の栽培例（北海道緑肥作物等栽培指針）

緑肥作物名	は種時期	は種量 (kg/10a)	施肥量(kg/10a)			すき込み 時期
			窒素	リン酸	カリ	
えん麦（一般）	8月上～中旬	15～20	4～6	5～10	0～5	10月中旬 ～ 10月下旬
えん麦野生種(ソルビガ-、サイヤ-)		10～20	5	5	0～5	
シロカラシ類(キカラシ)※1,2	8月上～下旬	2	5～8	5～10	0～7	
ひまわり(りん蔵) ※2	8月上～下旬	1.5～2	4～6	8～10	0～10	

※1・そうか病発生ほ場では前作として用いない

・根こぶ病発生の恐れがあるので、前作又は後作にアブラナ科野菜の作付けはしない

※2 キタネコブセンチュウやキタネグサレセンチュウの密度を高めるので、後作物の選定に注意する

<ばれいしょ>

病害が発生しやすくなる時期です。適正な防除を実施して下さい。

1 疫病の防除

表2 疫病の防除薬剤例

農薬名	使用倍率(倍)	使用時期 (収穫前)	使用回数 (以内)	効果の発現	疫病以外の対象 病害と倍率
					塊茎腐敗
ランマンフロアブル	1,000～2,000	7日	4回	予防	1,500
レーバスフロアブル	1,500～2,000	7日	2回	予防・治療	1,500

2 アブラムシ類・オオニジュウヤホシテントウの疫病の防除

ほ場をよく観察し、害虫の発生状況、収穫前日数を考慮して防除を検討してください。
特に林地や防風林近くでの多発に注意してください。

表3 アブラムシ類・オオニジュウヤホシテントウの防除薬剤例

農薬名	対象害虫		使用濃度 (倍)	使用時期 (収穫前)	使用回数 (以内)
	アブラムシ類※	オオニジュウヤホシテントウ			
アドマイヤー顆粒水和剤	● (ジャガ/モモ/ワタ)	●	5,000～ 15,000	14日	2回
ウララDF	● (ジャガ/モモ/ワタ)		4,000	7日	2回

※ジャガ：ジャガイモヒゲナガアブラムシ、モモ：モモアカアブラムシ、ワタ：ワタアブラムシ

※●は登録があり、道ガイドに掲載されているもの、○は登録があるもの(以下、同じ)

3 茎葉処理

(1) 薬剤処理による方法

茎葉枯凋剤の散布は塊茎が目標の大きさに達した時期で晴天無風の日を選んで散布してください。乾燥時の散布は維管束褐変が生じやすくなるので使用を避けてください。

表4 茎葉枯凋処理剤

農薬名	使用量 (ml/10a)	水量 ($\frac{L}{10a}$)	使用時期	使用回数 (以内)
デシカン乳剤	250~450	100	茎葉黄変始~収穫3日前まで	2回

※接触剤のため茎葉にまんべんなく薬剤を付着させる。

※茎葉黄変期前に使用した場合、枯凋が不完全になる場合がある。

※処理後2~3時間以内に、降雨が予想される場合には使用を避ける。

※散布の際にはドリフトを起こさないように注意する。

(2) リーフチョッパーによる方法

本年は高温による軟腐病の発生が懸念されます。発生しやすいほ場では作業前に銅剤等で防除をしましょう。

リーフチョッパーを使用する場合は以下のことに注意してください。

- ・茎葉処理作業は茎葉黄変期後の好天時に作業する。
- ・塊茎の損傷や緑化防止のため、刈取り高さは培土を崩さないよう地表から余裕をもたせて処理する。
- ・後部に石れきが飛散しやすく危険なので、周囲に人がいないことを確認後処理する。

<豆類>

豆類は全般的に生育が進んでおり、過繁茂で風通しの悪いほ場も散見されますので、このようなほ場では防除の徹底をお願いします。

1 大豆の菌核病防除

防除1回目の10日後を目安に2回目の防除を行いましょう。

表5 大豆菌核病の防除薬剤例

回目	目安時期	薬剤名	使用濃度 (倍)	使用時期 (収穫前)	使用回数 (以内)	備考
①	開花始の 10~15日後	トップジンM水和剤	700~1,000	14日	4回	紫斑病に登録あり
②	①の10日後	ファンタジスタ顆粒水和剤	2,000	7日	3回	紫斑病に2,000~4,000倍 で登録あり

2 大豆のマメシクイガの防除

マメシクイガは莢伸長始（およそ半分の株に2～3cmの莢が認められた日）になってから6日後（開花約16日後）に1回目の薬剤散布を行い、その10日後に2回目を行います。以下の薬剤でカメムシ類との同時防除が可能です。

表6 マメシクイガの防除薬剤例

回目	時期	農薬名	使用濃度 (倍)	使用時期 (収穫前)	使用回数 (以内)
①	8/上	ゲットアウトWDG	3,000	7日	3回
②	8/中	スミチオン乳剤	1,000	21日	4回

3 大豆 ベと病の防除

抵抗性品種（ユキホマレ等）でも発生しているほ場が見られます。

上位葉の病斑数が30個/葉（葉の全面に病斑がみられる）以上が防除水準となりますので、今一度ほ場をご確認ください。

表7 ベと病の防除薬剤例

農薬名	使用倍率(倍)	使用時期 (収穫前)	使用回数 (以内)
フェスティバルC水和剤	600	7日前	3回
プロポーズ顆粒水和剤	1,000	21日前	2回

4 小豆・菜豆の菌核病、灰色かび病の防除

金時は開花始が平年より9日早まり、小豆についても平年より早まりました。

このため、防除のタイミングも例年より早くなりますので注意してください。開花後に曇雨天が続くと発病しやすくなります。ほ場の生育に合わせ、適期防除に努めてください。

◎ 小豆防除適期 1回目：開花始後 7～10日目 2回目：1回目防除の10日後

◎ 菜豆防除適期 1回目：開花始後 5～7日目 2回目：1回目防除の10日後

（金時：R5開花始 7/4、手亡：R5開花始 7/8）

表8 小豆・菜豆 菌核病、灰色かび病を中心とした防除例

回数	薬剤名	使用濃度 (倍)	使用時期 (収穫前)	使用回数 (以内)	炭そ病
1回目	オルフィンフロアブル※1	2,000	7日	3回	—
2回目	ブロードワン顆粒水和剤※2	1,000	14日	4回	○
	または プライア水和剤	1,000	14日	4回	○
3回目	ファンタジスタ顆粒水和剤	2,000	7日	3回	○

※1 「オルフィンフロアブル」は炭そ病に効果がないため、炭そ病発生ほ場では「ブロードワン」を使用するか、「トップジンM水和剤」との併用で対応する。

※2 「ブロードワン顆粒水和剤」はチオファネートメチルを含むので、トップジンMとの総使用回数(4回)に注意。

5 マキバカスミカメの防除(小豆)

近年、小豆のマキバカスミカメによる子実の被害が発生しています。子実の表面に針で刺したような被害が発生します。本年は莢の伸長が早いため、被害の発生が懸念されますので、菌核・灰色かび病防除との同時防除をお勧めします。

(平常年では、8月中旬に発生する第2世代の成虫が小豆の莢を吸汁加害するので、この時期に防除します)

表9 小豆 マキバカスミカメの防除例

農薬名	使用濃度 (倍)	使用時期 (収穫前)	使用回数 (以内)
スミチオン乳剤	1,000	21日	4回

6 マメアブラムシ(小豆)

7月中旬以降に高温少雨の日が続くと急激に発生することがあります。発生が見られた場合は防除を実施します。発生は局所集中的なので、ほ場の一部で発見したらその部分だけでも直ちに薬剤散布し拡大を抑えることが重要です。

表10 小豆 マメアブラムシの防除例

農薬名	使用倍率 (倍)	使用時期 (収穫前)	使用回数 (以内)
モスピランSL液剤	2,000~4,000	14日	3回
ウララDF	4,000	7日	2回

7 大豆・小豆・菜豆 ハダニ

ハダニが寄生すると葉に白い斑点が発生し、多発すると褐変して生育不良を起こします。ほ場でハダニや葉の褐変等を確認した場合は速やかに防除を行いましょう。

表11 ハダニの防除例

対象豆類	農薬名	使用倍率 (倍)	使用時期 (収穫前)	使用回数 (以内)
大豆	トクチオン乳剤	1,000	30日	3回
	コロマイト乳剤	1,500	7日	2回
小豆	トクチオン乳剤	1,000	30日	2回
	コロマイト乳剤	2,000	14日	2回
	カスケード乳剤	4,000	7日	2回
菜豆	コロマイト乳剤	1,500	7日	2回
	ダニトロンフロアブル	1,000	7日	1回

<てんさい>

ほのほの情報や農作物防除基準を参考に適正防除に努めてください。

野菜

<たまねぎ>

倒伏が早まっています。倒伏後は適期根切りにより品質向上を図ってください。

1 倒伏期～根切りまでの防除

灰色腐敗病や細菌性病害の被害を防ぐため適期に防除を実施し、被害軽減に努めてください。また、多雨時の収穫直前防除の際、通常時のトップジンM水和剤の代わりにベルコート水和剤の使用を検討してください(耐性菌の懸念があるため)。

表1 たまねぎ病害の防除例

使用時期	薬剤名	使用濃度(倍)	使用時期(収穫前)	使用回数	成分回数	白斑葉枯病	小菌核病	軟腐病	貯蔵腐敗	
8月上旬	シルバキュアフロアブル	2,000	前日	3回以内	1回	○	○		○	
	アグレプト液剤	1,000	7日前	5回以内	0回			○		
根切り直後	スミレックス水和剤	1,000	前日	5回以内	1回	貯蔵腐敗病				
収穫直前	通常	トップジンM水和剤	500～1,000	前日	5回以内					1回
	多雨	ベルコート水和剤	1,000	前日	5回以内					1回

2 根切り作業

根切りの目的は、変形、裂皮、皮ムケ防止や均一な枯葉、着色促進による品質の向上です。適期に根切りを行い、品質低下を防ぎましょう。

○根切り時期の目安

早生品種	オホーツク 222	倒伏揃後 5～7 日後
中生・中晩生	北もみじ 2000、イコル	倒伏揃後 10～14 日後

※「倒伏揃」…茎葉が 80～90%倒伏した時期。

○土壌が乾燥した晴天日に行う。

○30℃近くの高温日で日差しの強い日は地上に露出した部分(特に球下半分)に日焼けを生じる恐れがあるため、作業を見合わせる。または、夕方以降に作業する。 加えて、枕地を手掘りして寄せる場合は、茎葉で球を覆い長期間放置しない。

○降雨により収穫が遅れた場合は、再度根切りを行う。

3 収穫作業

収穫の遅れは外観品質低下の原因になります。根切り後は茎葉が枯葉し首部の仕上がりを確認したら早めに収穫を行ってください。

- ・肌腐れ等の障害球が混入しないよう収穫前に除去してください。
- ・タッピングは首部が十分乾燥してから行ってください。
- ・収穫後のコンテナは、搬出しやすい排水良好な場所で風乾してください。

<ヤマ/イモ>

1 緑肥栽培

来年度ながいも作付け予定ほ場で前作が秋まき小麦の場合は、小麦収穫後に緑肥のえん麦野生種を栽培し地力を高め、キタネグサレセンチュウの密度低下を図ってください。

※は種等の詳細は畑作(小麦)収穫跡地の後作緑肥作付参照